

平成 29 年 6 月 15 日現在

機関番号：34504

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2015～2016

課題番号：15H06765

研究課題名(和文)適正飲酒に関する心理尺度の開発

研究課題名(英文)A screening test for harmful alcohol consumption with positive items

研究代表者

高橋 伸彰(TAKAHASHI, Nobuaki)

関西学院大学・文学部・助手

研究者番号：60392461

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、節制飲酒という飲酒のポジティブな側面を測る尺度を開発した。開発された節制飲酒尺度は、従来のアルコール依存症のスクリーニングテストと相関の高い項目群と低い項目群からなっていた。加えて、節制飲酒尺度得点は従来のテストでは連関がない対人関係の側面との連関が認められた。そして、節制飲酒尺度は十分な再検査信頼性を有していることが明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：This study developed a screening test for harmful alcohol consumption with positive items. This test consisted of a group of items highly correlated with the conventional alcohol dependence screening test and a group of items having a low correlation with it. In addition, this test score was related to aspects of interpersonal relationship not related in the conventional test. And this test had sufficient test-retest reliability.

研究分野：心理学

キーワード：アルコール依存 アルコール乱用 アルコール使用障害

1. 研究開始当初の背景

(1)【現在のアルコール依存症の判定】 現在、アルコール依存症の疑いのある者に対して、典型的な症状の有無を基にした病理的基準による診断に並行して、問題飲酒の表現のみからなるスクリーニングテストを用いた統計的基準による判定が行われている。一方、節度を保った飲酒については精神医学的診断では考慮されていない。また、2013年に改訂されたアメリカ精神医学会による「精神疾患の診断・統計マニュアル」の第5版(Diagnostic and statistical manual of mental disorders, Fifth edition; DSM-5)では、「アルコール使用障害」は従来「アルコール乱用」とされてきた状態を含む疾患となった。

(2)【心理測定法から見た従来のテストの問題点】 問題飲酒の表現のみからなるスクリーニングテストでは、健康的状態からの逸脱というアルコール乱用の側面について測ることができない。加えて、問題飲酒について問う設問は直接的であるため、臨床場面においては自身の問題を小さく答えるバイアスを生じさせ、質問紙調査においては回答拒否・無回答を生じやすくしている可能性がある。

2. 研究の目的

本研究では、節制飲酒という飲酒のポジティブな側面を測る尺度を開発することを目的とした。本研究において作成する尺度により、1) 従来軽視されてきたアルコール依存症の「節制飲酒ができなくなった(乱用)」という側面を検討できる。また、本研究において開発される尺度は直接的に問題飲酒について問わないことから、2) アルコール依存症者の否認による回答バイアスや質問紙調査における回答拒否・無回答を減らすことができる。そして、3) 否認の強いアルコール依存症者に対しては、もはや節制飲酒することができなくなったという現状を示すことによって、病識理解を促す二次予防教育に、健常成人に対しては節制飲酒を呼びかける一次予防教育につなげることができると考える。

3. 研究の方法

(1)【節制飲酒尺度の作成】 比較的幅広い年齢層の成人(26歳-51歳)を対象に、節度を保った状態での飲酒行動について半構造化面接法を用いた聞き取り調査を行った。同時に、節度を保った飲酒についての新聞記事を収集し、分類を行った。これらをもとに節度を保った飲酒様式10項目を作成し、「節制飲酒尺度」とした。

(2)【調査概要】 学術調査においても広く用いられているWeb調査会社に登録しているモニタおよび一般市民に対して、既存のアル

コール使用障害のスクリーニングテストに照らしての妥当性(併存的妥当性)および有害事象の併存性について検討した。また、Web調査会社に登録しているモニタに対しては、再度調査を実施し(縦断調査)、再検査信頼性について検討した。そして、協力の得られた3箇所のアルコール依存治療施設に治療中のアルコールの問題を持つ患者に対しても、節制飲酒尺度を施行した。

4. 研究成果

(1)【節制飲酒尺度項目の作成】 節度を保った飲酒に関する、成人を対象とした半構造化面接法を用いた聞き取り調査による結果と新聞記事調査による結果は互いによく一致しており、これらを基に節制飲酒尺度項目を作成した。作成した項目は以下の通りである。

お酒を飲む時には、食べ物(おつまみや食事など)が必要だと思う
お酒を飲む時には、その場の雰囲気大切にしたい
お酒を飲む時にははつつ、グラスなど酒器を使って飲んでいる
次の日のことを考えて、お酒を飲む量をひかえる
お酒は他の人と一緒に飲むことが多い。
お酒を飲むと様々な面で効率が下がることが多いと思う
ストレス解消目的で自らお酒を飲むことはめったにないと思う
お酒を飲む時にはソフトドリンクも積極的に飲むようにしている
ゆっくり落ち着いて自分のペースでお酒を飲むことが好きだ
自分がお酒を飲みすぎて後悔するなど、考えられないと思う

全ての調査において、節制飲酒尺度は「とてもあてはまる」「少しあてはまる」「あまりあてはまらない」「全然あてはまらない」の4件法で回答を求め、「とてもあてはまる」を4点、「全然あてはまらない」を1点とした。すなわち、節制飲酒尺度では得点が低ければ低いほど、正常な状態から逸脱したアルコール乱用の状態であることを示す。

(2)【併存的妥当性】 既存のアルコール依存症のスクリーニングテストであるAUDIT(Alcohol Use Disorders Identification Test) 得点と節制飲酒尺度得点との間にWeb調査、一般市民調査ともに相関は認められなかった。しかし、内的整合性の検討からは、AUDIT得点と強く連関のある項目群と、AUDIT得点と連関がない項目群に分かれることが明らかとなった。後者のAUDIT得点と連関のない項目群は、これまで測られることがなかったアルコール乱用の側面を測っている可能性がある。

(3)【有害事象の併存】 節制飲酒尺度が乱

用の程度を測る尺度であるという前提のもと、一般市民調査において、アルコール乱用とインターネットアディクション、ニコチン使用障害、およびギャンブル障害との併存をそれぞれ、インターネットアディクションテスト (Internet Addiction Test ; IAT) 、ファーストニコチン依存度指数 (Fagerstrom Test for Nicotine Dependence ; FTND) 、および South Oaks Gambling Screen (SOGS) を用いて検討した。その結果、いずれの依存・嗜癖もアルコール乱用との連関は認められなかった。同様に、Web 調査および一般市民調査において、精神的健康の指標として、WHO-5 、K6 、13 項目 7 件法 sense of coherence スケール日本語版 を用いて検討したところ、いずれの調査においても節制飲酒尺度得点と精神的健康の指標との相関は認められなかった。対人関係の指標として、信頼感尺度 、被受容感・被拒絶感尺度 、自閉症のスクリーニングテストである AQ10 を用いて検討したところ、AQ10 と節制飲酒尺度との間に相関は認められなかったが、信頼感尺度における「自分への信頼」「他人への信頼」、被受容感・被拒絶感尺度における「被受容感」それぞれと節制飲酒尺度得点との弱い正の相関が認められた。これらの正の相関は AUDIT 得点との間では認められないため、節制飲酒尺度によって新たに測ることができたアルコール乱用の側面であると考えられる。なお、これらの連関の特徴は Web 調査および一般市民調査で一貫して認められている。

(4)【再検査信頼性】 再検査信頼性を検討するため、Web 調査に参加した調査協力者に対して、1 年後に再度、調査参加を依頼し、回答を求めた。信頼性係数を算出した結果、節制飲酒尺度の十分な信頼性が認められた。

(5)【病院調査】 協力の得られた 3 箇所のアルコール依存治療施設に加療中のアルコールの問題を持つ患者に対して、調査を実施した。その結果、アルコールの問題をもつ患者の AUDIT 得点は一般市民調査での参加者の得点よりも有意に高かった。また、アルコールの問題をもつ患者の節制飲酒尺度得点は一般市民調査での参加者の得点よりも有意に低かった。以上のことは、節制飲酒尺度によってアルコール使用障害のスクリーニングが可能であることを示唆している。

(6)【今後の展望】 現在までに、3 箇所のアルコール依存治療施設から協力が得られているが、当初予定していたよりも現在加療中のアルコールの問題をもつ患者からの参加が得られなかった。今後、さらにアルコール依存治療施設の協力を仰ぎ、データを増やす。そして、従来のアルコール依存症者をスクリーニングするためのカットオフポイントと予防教育に有用であると考えられるアルコ

ール乱用者をスクリーニングするためのカットオフポイントをそれぞれ定める予定である。

<引用文献>

- Saunders, J. B., Aasland, O. G., Babor, T. F., de la Fuente, J. R., & Grant, M. (1993). Development of the Alcohol Use Disorders Identification Test (AUDIT): WHO collaborative project on early detection of persons with harmful alcohol consumption-II. *Addiction, 88*, 791-804.
- Young, K. S. (1998). *Caught in the net*. New York: Wiley.
- Heatherton, T. F., Kozlowski, L. T., Frecker, R. C., & Fagerstrom, K. O. (1991). The Fagerstrom test for nicotine dependence: A revision of the Fagerstrom tolerance questionnaire. *British Journal of Addiction, 86*, 1119-1127.
- Lesieur, H. R., & Blume, S. B. (1987). The South Oaks Gambling Screen (SOGS): A new instrument for the identification of pathological gamblers. *American Journal of Psychiatry, 144*, 1184-1188.
- Regional mental health services (2012). The WHO-5 website. Retrieved from <http://www.who-5.org/> (2017 年 1 月 20 日)
- Kessler, R. C., Andrews, G., Colpe, L. J., Hiripi, E., Mroczek, D. K., Normand, S. L. T., Walters, E. E., & Zaslavsky, A. M. (2002). Short screening scales to monitor population prevalences and trends in non-specific psychological distress. *Psychological Medicine, 32*, 959-976.
- 戸ヶ里泰典・山崎喜比古・中山和弘・横山由香里・米倉佑貴・竹内朋子 (2015). 13 項目 7 件法 sense of coherence スケール日本語版の基準値の算出. *日本公衆衛生雑誌, 62*, 232-237.
- 天貝由美子 (1997). 成人期から老年期に渡る信頼感の発達: 家族および友人からのサポート感の影響. *教育心理学研究, 45*, 79-86.
- 杉山 崇・坂本真士 (2006). 抑うつと対人関係要因の研究: 被受容感・被拒絶感尺度の作成と抑うつ的自己認知過程の検討. *健康心理学研究, 19*, 1-10.
- Baron-Cohen, S., Wheelwright, S., Skinner, R., Martin, J., & Clubley, E. (2001). The autism-spectrum quotient (AQ): Evidence from Asperger syndrome/high-functioning autism, males and females, scientists and mathematicians. *Journal of Autism and*

Developmental Disorders, 31. 5-17.

()

5. 主な発表論文等

研究者番号：

〔雑誌論文〕(計1件)

高橋伸彰・箕浦有希久・成田健一 (2017).
Web調査における Satisficing 回答者の基本属性：調査年・調査会社の比較から 関西学院大学 心理科学研究, 43, 19-24.
査読なし

(4)研究協力者

()

〔学会発表〕(計1件)

高橋伸彰・箕浦有希久・成田健一 心理調査における Satisficing 回答傾向 (2):調査年が異なる3つのWeb調査から. 日本社会心理学会第57回大会 2016年9月17日~18日 関西学院大学 (兵庫県・西宮市)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等
なし

6. 研究組織

(1)研究代表者

高橋 伸彰 (TAKAHASHI, Nobuaki)

関西学院大学・文学部・助手

研究者番号： 60392461

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者